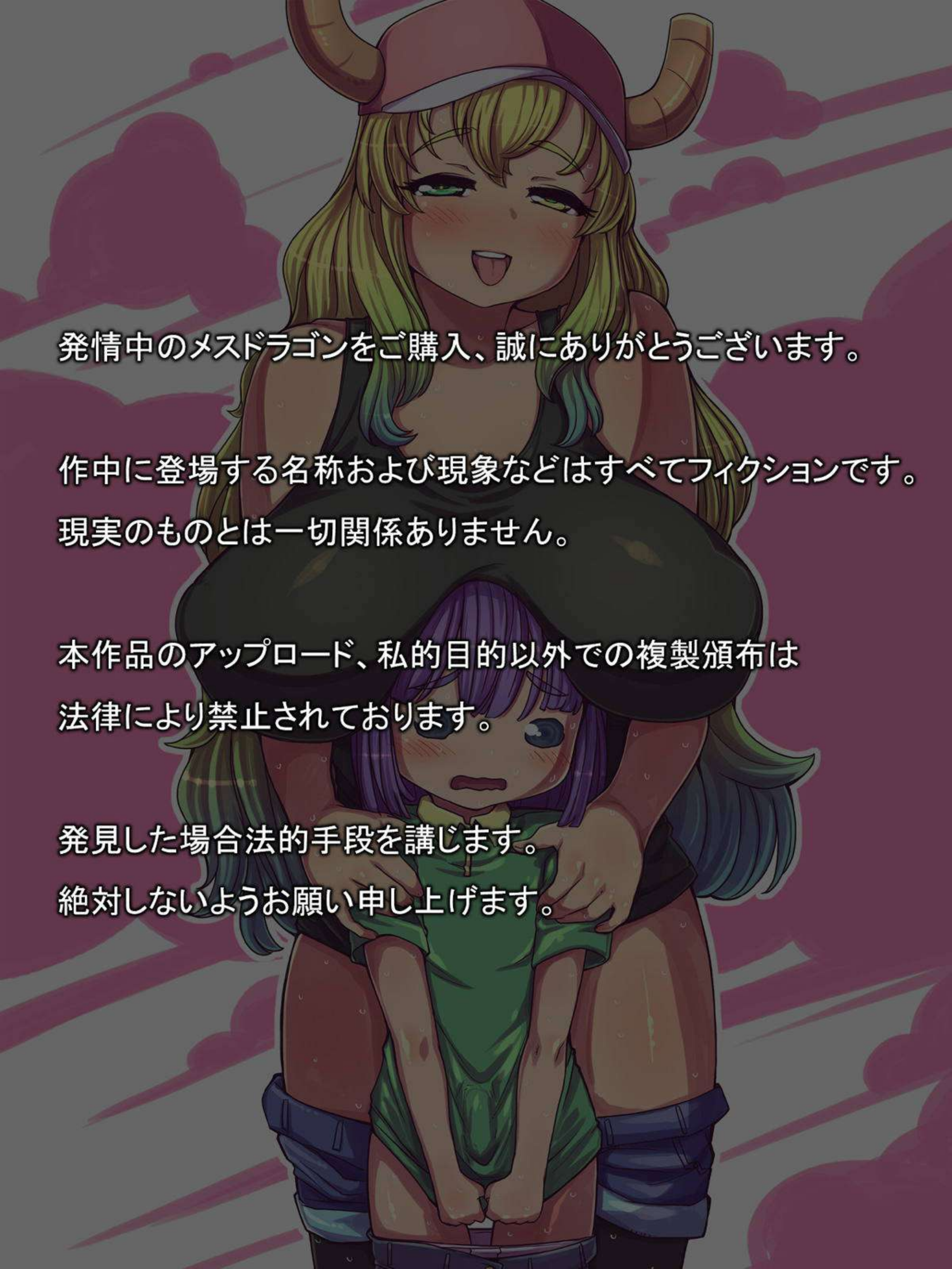
発情中のメスドラゴン

つじもが町に殺ってきた



発情中のメスドラゴンをご購入、誠にありがとうございます。

作中に登場する名称および現象などはすべてフィクションです。
現実のものとは一切関係ありません。

本作品のアップロード、私的目的以外での複製頒布は
法律により禁止されております。

発見した場合法的手段を講じます。
絶対しないようお願い申し上げます。

序章

ドラゴンをご存知ですか？

とくにメスのドラゴンは凶暴で
発情中はさらに気性が荒いと言われています。

昨今、自動車が上から押しつぶされる怪事件が頻発しています。

巨人に踏みつけられた、宇宙人の仕業だ、
地元の悪がきのイタズラだ、など様々な憶測が飛び交いましたが、
あれは発情したドラゴンが卵を産み付ける為の寄生生物と
自動車が似ていることから起こる擬似生殖行為ということを
知っている人は少ないでしょう。

これを知る者の中にはドラゴンカーセックスと呼び
欲情するような性癖の者も居るとか居ないとか・・・・。

ある家に居候しているメスのドラゴンも、発情期を迎えていました。

その家が代々魔術師の一族の家柄だったため、
被害は最小限に抑えられたようですが・・・・

起こった被害はまったくゼロではないのです。
ドラゴンは恐ろしい生き物なのですから・・・・。

発情中のメスドラゴン

発情中のメスドラゴン 目次

3p.序章

5p.月曜日
翔太君、イケナイものを見る
（のぞきはいけません）

18p.火曜日
半人前の魔術師
（一生懸命なのはいいことです）

36p.水曜日
翔太くんのお姉さん、すごい
（すごい、にもいろんな意味がありますね）

47p.木曜日
魔術師の独占欲
（独り占めはよくないですね）

60p.金曜日
素直になる儀式
（自分に嘘はつけません）

71p.土曜日
お預けの午後
（裸で正座待機ってやつですよ）

82p.日曜日
何事もなかったかのように過ぎ去る嵐
（めでたしめでたしです・・・か?）

93p.終章

94p.あとがき

つじもが町に殺ってきた

発情中の

メスドラゴン

月曜日
翔太君、イケナイものを見る
（のぞきはいけません）

つじもが町に殺ってきた

その夜、翔太くんがトイレに起きると
リビングで鎖につながれたルコアがパパに跨り、
なにか儀式めいたことしていました。

「我が魔術師が放つ白い血のほとばしりを持って、
　その禍々しい情欲を鎮めたまえ・・・・」

なまめかしく体をクネらせ、自分に見せる表情とは違う
ひどく淫猥で高揚した表情・・・・

「はやくっ・・・・はやくぅ！」

「くうぅ・・・すごい締め付けだ・・・・ッ！」

翔太くんは息を呑み、その光景を食い入るように見入っていました。

パパがやっていることにはきっと意味があるはずだ
そうでなければ裸であんなふうに抱き合ったり、
ルコアとあんな事をするはずないっ！

あの悪魔が魔法でパパを魅了したのか？
いや違う、首輪をして魔力を押さえ込んでいるのは
きっとパパの力だ・・・・どうして・・・・・

翔太くんはパパのことを信頼していたので
すぐにでも飛び込んで何をやっているのか聞くべきだと
自分でもわかっていながら、なぜか覗き見を続けてしまいました。

「うっ！」

「あはぁ！すごいッ！すごぉい！」

パパの勃起したペニスから、勢いよく飛び出す精液。
ルコアの顔にかかり、それを興奮した表情で浅ましく浴びる彼女。

あれはパイズリだ・・・
インターネットで見たエッチなサイトに載っていた
大きなおっぱいを使って行う変態行為。

自分も大きくなったら、ルコアの胸でその行為をしたいと
ずっと願っていたその変態的なプレイを
パパがやっている・・・・。

翔太くんはいけないものを見てしまったような感情、
パパとルコアがそういう関係を結んでいることに対する
整理のつかない気持ち、こみ上げ抗うことのできない
性の高まりが頭の中でごちゃ混ぜになって、
何もできず股間を膨らませながらそれを見つめていました。

「ああ・・・あはぁ・・・うれしい・・・もっとほしいなぁ・・・」

「はあはあはあ・・・これ程度では、さすがに足りませんか・・・」

今度はパパが後ろからルコアの尻を抱きかかえました。
まるで動物の交尾のようにつながる二人。

パパの腰の動きに突き上げながら、ルコアは豊満な胸を
ブルンブルンと震わせ息を荒げて喘いでいる。

「セックスしてる・・・・パパと・・・ルコアが・・・」

他人のセックスを直に見ることがはじめての翔太くんにとって
それが何か意味のある儀式であるはずと思考する余裕は
もう既にありませんでした。

めまいがするほどの動悸と、張り詰めた股間。
無意識のうちにその硬く勃起した陰部を
手で押さえていました。

激しい動きが続き、ルコアのうっとりとした表情からもれる
なまめかしくも激しいあえぎ声が途切れました。

「いやっ・・・中ッ！中にだしてぇ」

「静まれ・・・情欲の魔物ッ！静まれ・・・・！」

パパがルコアの尻肉をつかみ、それに自分の肉棒を挟んでしごきます。
ぬるぬるになった肉棒は豊満な尻肉に挟まれながら前後して
パイズリの時みたく激しい刺激をペニスに与えているようでした。

すごい・・・すごく気持ちよさそう・・・
ルコアの体で・・・あんなに気持ちよくなってる・・・

翔太くんは無意識のうちに自分のペニスを握っていました。
あんなふうにしたい、やわらかく豊満な彼女の肉で
自分のコレを挟みたい・・・あんなふうにしてルコアを喜ばせたい・・・

「あっ！あっ！あああ～！！」

ルコアがなまめかしく苦しいような声を漏らすと
その声は翔太くんの中でイッパイに響き渡り
彼女が感じているかのような絶頂に貫かれました。

ウッ！ウウッ！

パパのペニスから白く白濁した体液が飛び出しました。
翔太くんの股間にもどくんどくんと抗えない快感が慟哭しています。

初めての射精、ルコアとパパのセックスをみて、
初めての精通を体験してしまいました。

そしてその股間に溢れるぬらぬらとした温かみには
特別な魔力が宿っていると分かりました。

「はあはあはあ・・・あ、ありがとう・・・
これで、今週は何とか・・・・」

「はあはあはあ・・・・私の力ではもう抑え切れません・・・
やはり、この時期は一度帰られては・・・？」

（え、ルコアが帰る・・・？そんな・・・・）

パパとルコアの会話を聞きながら、
ルコアが帰らなければならないような事態になっていると知る翔太くん。

そっと部屋に戻ると、濡れたパンツのままベッドに戻りました。
ルコアが帰る・・・言いようのない寂しさと不安の中
初めての射精と、魔術師独特の精力の消耗で、
すぐに深い眠りに落ちてしまいました・・・・。

発情中の

メスドラゴン

火曜日
半人前の魔術師
(一生懸命なのはいいことです)

つじもが町に殺ってきた

学校から帰ってくると、
ルコアはあからさまに卑猥な格好で翔太くんにせまりました。

「夕べ、覗いていたよね？　ナニしてたかわかるかな？」

「な・な・な！なにって・・・ナニ・・・その・・・」

上気したルコアの表情は、いつも翔太くんを可愛がってくれるそれより
明らかに熱っぽく、肩で息をするような雰囲気でした。

「も、もしかして・・・具合が、悪いの・・・？」

「ウフフフ、バレちゃったかぁ・・・・
具合が悪いわけじゃないんだけど、今ボクは発情期なんだぁ

自我を失って凶暴化しないように、
翔太くんのパパから沈静の儀式を施されているんだよ」

夕べのアレが思い出されて、
翔太くんの股間はびくびくと膨張して行きます。

「人間の精液を浴びるとね、少し抑えられるんだ・・・
人間の情欲は射精をもって解消するからね、それに感応して
少しだけ沈静化できるんだ

ねえ、翔太くんのそれで、ボクの中の悪い欲求を・・・
退治してくれないかなぁ・・・・？」

誘うように腰をくねらせて翔太くんにおねだりするルコア。

性の興味、具合の悪そうな彼女のへの助け、
翔太くんは恥ずかしさ以外に断る理由を見つけることができません。

「ど、どうすればいいのぉ・・・？」

「そう、そうやって、おちんちん扱いて・・・・」

「あ・・・ああ・・・・おっぱい・・・おっぱいに・・・・」

ルコアに言われるままにペニスを扱く翔太くん。
おっぱいに射精すればルコアの中の悪いものを退治できる、
そう信じて翔太くんは懸命にペニスを扱きました。

「わ、わるい悪魔め・・・この・・・いやらしい悪魔ッ！
退治ッ・・・退治してやる・・・はあはあはあはあはあ」

「ああッ！退治してっ・・・ボクの中の悪魔ッ！
ああ！翔太くんッ！きてっ！おっぱいにきて！」

翔太くんにとって初めての手淫でした。

言われるままにおちんちんをしごいて、
彼女の中の悪魔を封じ込めようと祈ります。

しかしそれはこみ上げてくる得体の知れない快感で
すぐにかき消されてしまいました。

「ああ！悪魔めっ！退治ッ！あ！あ！たったいじい！ああ！
あああああああああ！」

「ああ・・・翔太くぅん・・・・あはぁ・・・・」

「はあっ！はあっ！はあっ！はあっ！」

翔太くんはペニスの先端から体の奥底に蠢く
熱い針金を引き抜かれたような凄まじい快感に震えました。

「はああ・・・はあぁ～！」

自分のおちんちんがこんなに大量の白い液体を噴出するなんて、
その行為がこんなに、ありえないくらい気持ち良いだなんて、
信じられないことばかりで、ただ呻き、肩で息をしていました。

「すごい・・・すごいよ翔太くん・・・・もう、もう・・・」

ルコアはその時、翔太くんの性欲に感化され
徐々に自分の性欲を抑えきれなくなっていました。

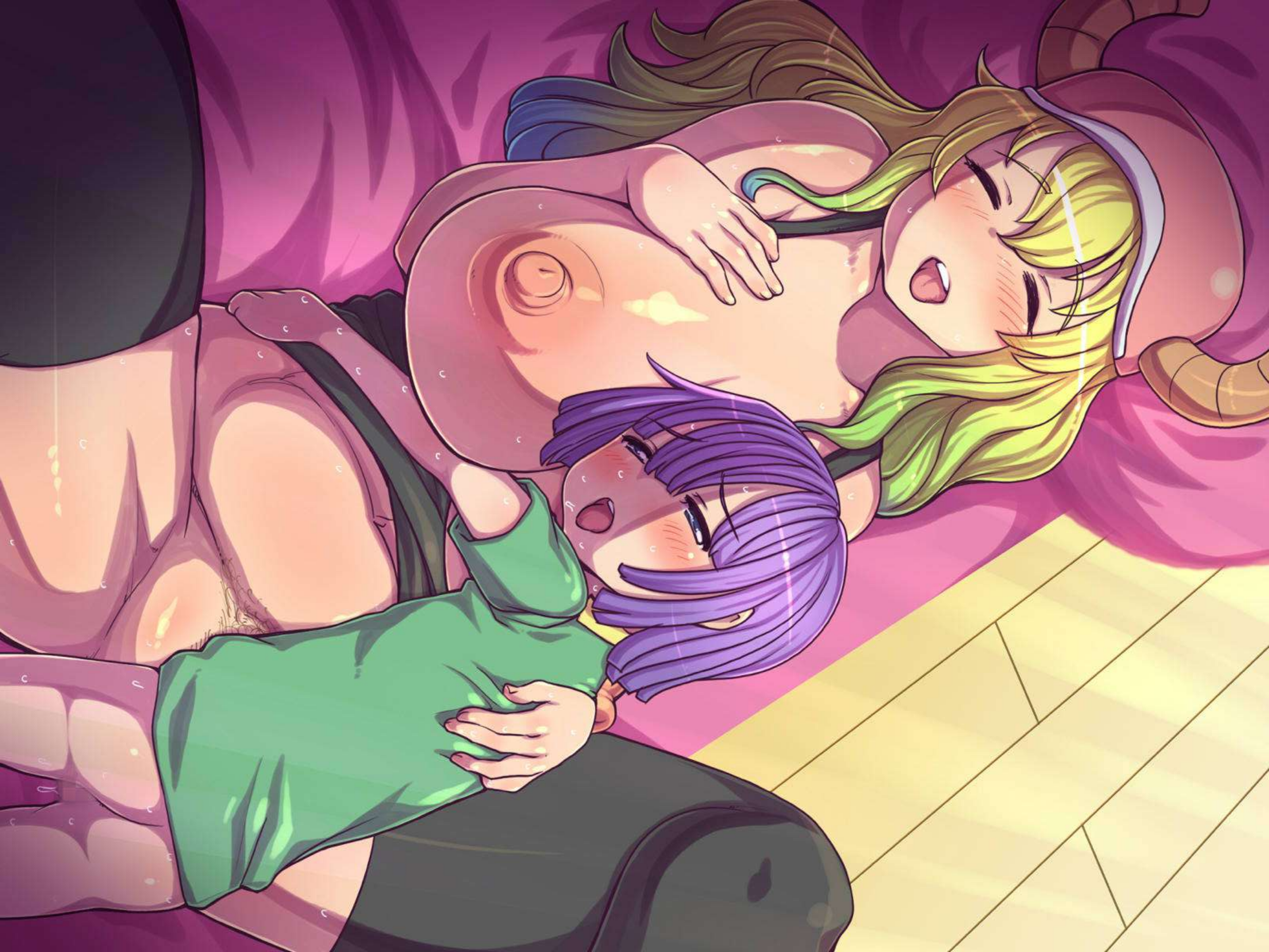
パパの魔術師としての儀式で押さえ込まれていた性欲の火薬に
翔太くんの未熟な欲望が火を入れてしまったのです。

「翔太くん・・・ココに、挿れて・・・・あはぁ」

翔太くんは催眠術にかかったかのように
ふらふらとルコアの体に抱きつき、とがった部分を彼女の泉に
突き立てました。

「ああ・・・やめて・・・ボク・・・・ああ・・・・」

魅了の魔法、ルコアの強大な魔力が暴走し、
いつもは愛でる対象の翔太くんを性欲の捌け口に見はじめていました。



「ああ！翔太くん！きてっ！もっと動いてッ！ああっ！あはぁ！」

「ああ！ルコアッ！あああ！るこあああああ～！！！！」

翔太くんは夢中になって腰を振ります。
自分の意思でやっているのか、魔法で動かされているのか
それすらももう分からないほど夢中になって
ルコアの中の感触を貪るように腰を振り続けました。

「アッ！アッ！アアッ！ああ！イイッ！いい！ああああ！」

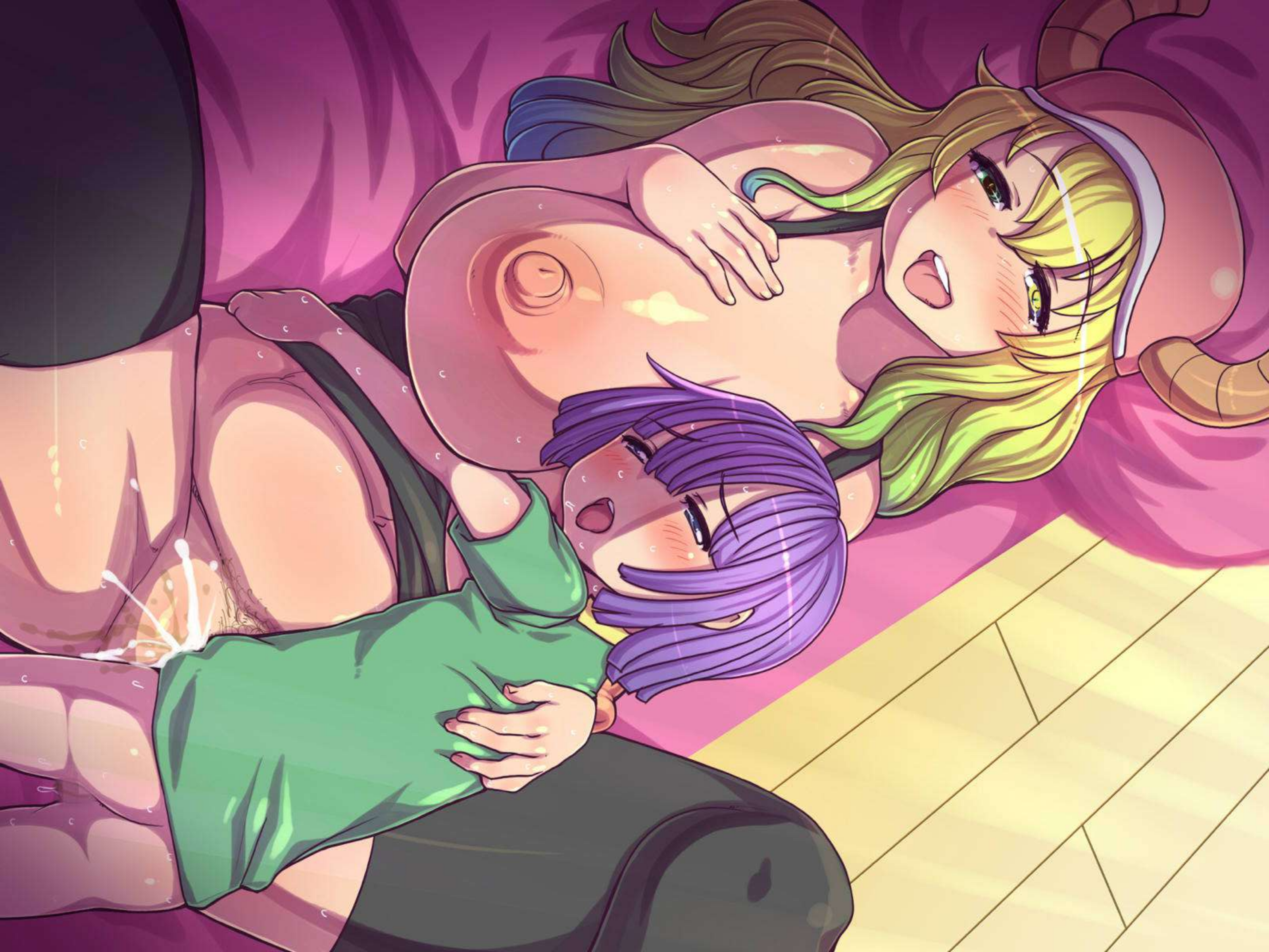
可愛くて仕方がない翔太くんが、自分の体に夢中になって腰を振る。

人間の営みを尊重するルコアにとって、
彼の意思を踏みにじるようなことは絶対にすべきでないと
心に誓っていました。

しかし発情中のメスにとっては平常時の想いなどは消えうせ、
情欲で一杯になるほど肉欲を求めていたのでした。

（ああ、またやってしまった・・・・
昔酒に酔って妹を犯してしまった時と同じ過ちを
今度は発情のせいにしてやってしまったんだ・・・・あはっ）

反省や悔いが欲望によって塗りつぶされていきました。
ルコアの発情期はいよいよ抑えがたいものになって
翔太くんを飲み込み始めたのです。



初体験・・・初めて女の人の膣で射精してしまった、
取り返しのつかないことをしたような恐怖心が、翔太くんをおそいました。

「こ、この悪魔ー！」

体の自由が効くようになった途端
ズボンも履かず逃げ出してしまう翔太くん。

膣の中に何度も打ち出された精液が、ルコアの情欲を満足させていました。

「ああ・・・あはぁ・・・素敵だよ・・・翔太くん・・・・あはっ・・・」

半人前の魔術師ではルコアの欲求を押さえ込むことはできませんでした。
それどころか、むしろ火をつけてしまったようです。

「翔太くん・・・まだまだボクの中の悪魔、退治できてないよ・・・？」

「ああ・・・あああ～？」

トイレに隠れた翔太くんのペニスが
むくむくと大きくなっていきました。

ルコアの肉体で気持ちよくなりたい・・・
まるでおちんちんが意思を持ったように
翔太くんの気持ちを無視して快楽を求めていました。

ルコアの魔力が翔太くんを好き勝手に操り
まるで性の奴隷にしてしまったようでした。

翔太くんは欲求のままルコアにまたがると
豊満な胸にペニスをうずめて腰を振りました。

「この悪魔めっ！サキュバスめ！ヘンタイヘンタイヘンタイ！
　あああ！あああ！おっぱいしゅごい！おちんちんとけるぅう！」

「あはっ！あはっ！いいよっ！乱暴にしてぇ！
　ボクの顔にきてっ！あは！あはあ！」

ずっとルコアのおっぱいでパイズリしたかった翔太くん。
暴走した欲求のまま、たがが外れたように乱暴に腰を突き出し続けました。

「このヘンタイ悪魔！このっ！このっ！このこの！ああでるっ！！！
　でるぅううう！」

びゅばっびゅばっと音を立てて噴出す精液。
腰が抜けるほど気持ちよくて、魂がおちんちんの先端から
抜け出てしまったんじゃないかというくらいの快感に
勝田くんは震えました。

「あはぁ・・・・お顔が・・・ボクのお顔に・・・
翔太くんの精液が・・・・ああ・・・・・・」

「はあっ！はあっ！はあっ！」

射精してもなお腰を振り続ける翔太くん。
何も考えられず、もう一度、もう一回、
何度も何度もおっぱいに挟まれたまま射精して、ルコアの顔を汚しました。

大量の精液で汚されたルコアは、もっと激しい欲望を欲していました。

「翔太くん、明日は友達をいっぱい連れてきてね
おねえさんがイイコトしてくれるって言うんだよ？ウフフフ・・・」

発情で暴走していたルコアは、翔太くんとの行為を発端に
人間の情欲を貪り始めたのでした・・・・。

発情中のスーパーラブコン

水曜日

翔太くんのお姉さん、すごい

（すごい、にもいろんな意味がありますね）

つじもが町に殺ってきた

「うふふふ・・・みんなもちゃんと勃起できるんだねぇ」

少年たちは裸になってルコアを囲んでいました。
ペニスを臍まで反り返らせ、ルコアの裸に欲情していたのです。

「すげえ・・・すげえおっぱい・・・」
「いいにおいする・・・」「翔太くんのおねえちゃんすごいね！」

「・・・・はあはあ・・・・みんな、みんなで悪魔を退治するんだ！
聖なる液をかけて、ルコアを・・・はあはあ」

どこまでルコアの魔法に魅了された結果かは分かりません。
しかし、若い人間のオスにとって、その魅惑は抗いがたいものでした・・・。

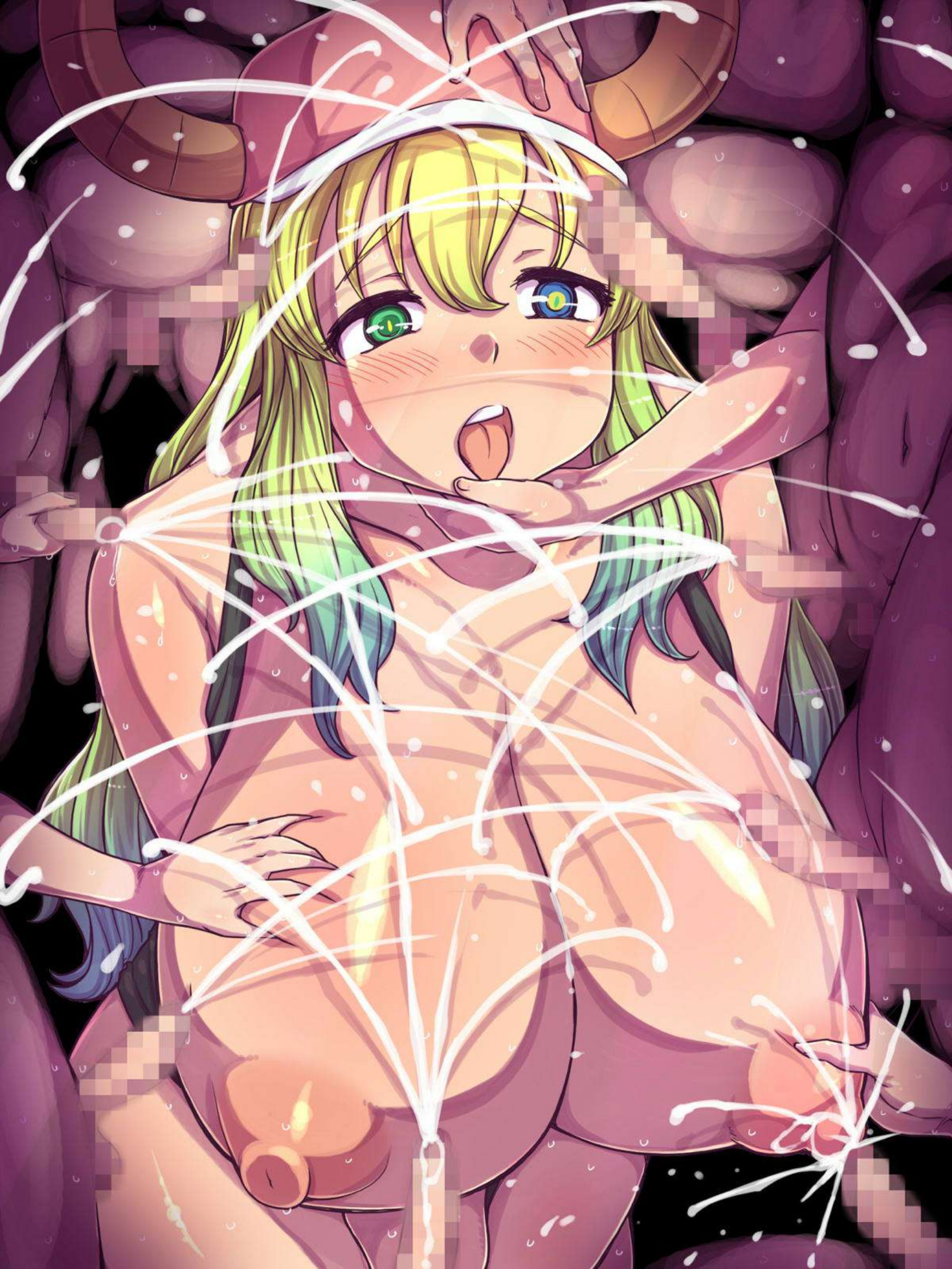
その日学校が終わると、クラスの友達は翔太くんの家に集まり、
おねえさんが言う「良いこと」に胸を躍らせました。

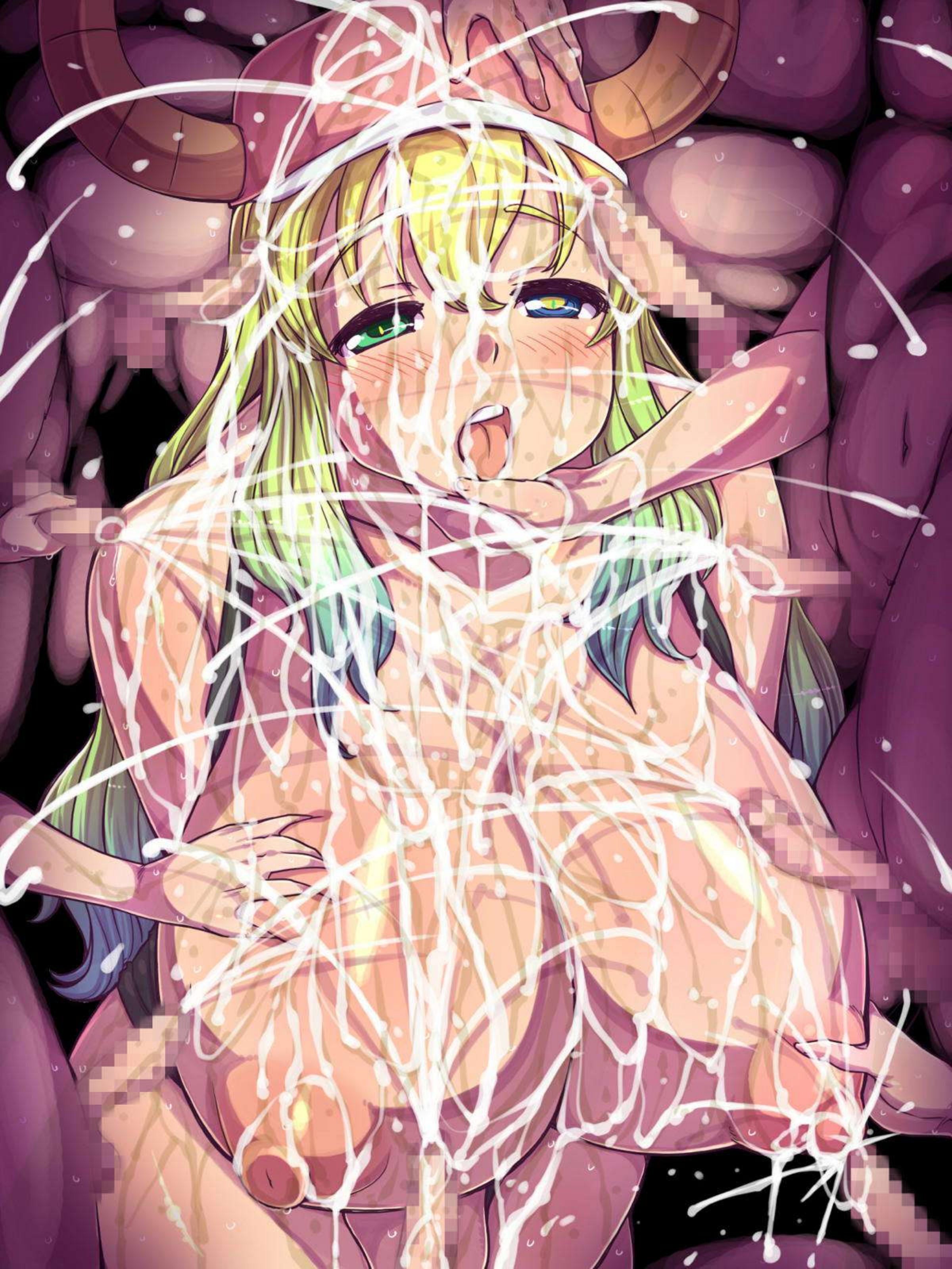
「こう、こうするの・・・・ああ・・・なんか・・・ヘンなかんじい」
「俺しってる・・・これ・・・こーやると・・・」
「あ・・・ああ・・・・なんか・すごいの来る・・・・」

翔太くんの友達は、ルコアのなまめかしい裸体と
指や口の愛撫でうっとりとしていました。

「みんな・・・みんなでいっせいにかけてね・・・・
ほら、ほら・・・・ほらぁ！」

「あっ・・・・」「え・・・？あああ！」「うわあああああ！」





ルコアめがけていっせいに迸る精液。
白い体液のシャワーがなまめかしい肉体を汚して
注がれる情欲の果てにルコアは感激しました。

「あはああ！すごいっ！すごいよぉ！君たちすごいぃ！
　あはあ！もっと、もっとボクにかけてよごして！ああはぁ！」

翔太くんの友達は、みんなほうけた表情で口をあけたまま
いままで体験したことのないすごい射精の快感にがくがくと震えるばかりです。

「あああっ！すごいっ・・・すごいぃ・・・！」「ああっ！ああ！あ！」
「おねえさんッ！おねえさんすごいよぉお！すごいっ！」

（ああ、僕のルコアが、皆に汚されて喜んでるぅ・・・・）

翔太くんは皆と一緒になって楽しんでいるようでいて
なぜか自分の大切なものが離れていってしまうような
寂しさを覚えていました。

「こうだっ！こうだっ！おまえなんか！こうだぁあ！」

翔太くんはルコアを押し倒すと、
彼女にまたがって膣にペニスを突き立てました。

自分だけはルコアとセックスができる、友達とは違って特別なんだ、
そういう気持ちが、より乱暴に腰を動かさせるようでした。

「ああ！翔太くんっ！はげしいよぉ！こわれちゃう！あはぁ！」

「すごい・・・すごいきもちよさそう・・・」「いいなぁ・・・」
「翔太くん次ぼく！変わって！」「だめだよぉ、ぼくもやりたい！」

翔太くんは夢中になって腰を動かしました。
譲るもんか・・・レコアは僕のしもべなんだ・・・
この気持ちの良い穴は僕だけのものだ・・・・

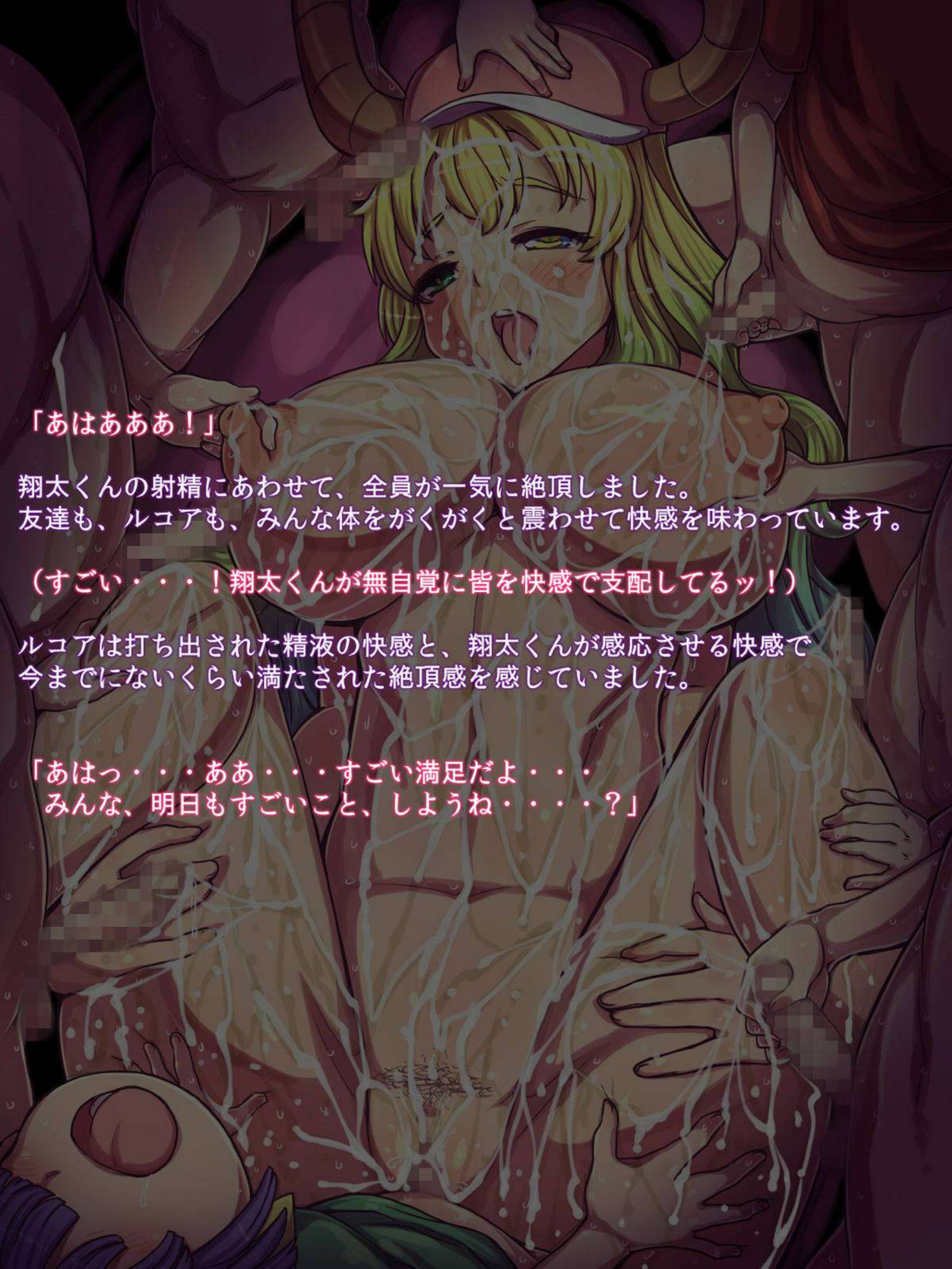
「ああ！はげしい！すごいよぉ・・・みんなも・・・・
皆もボクにかけて！ああ！きて！きて！」

翔太くんとセックスをしながら友達のペニスをしゃぶったり、
しごいたりいろいろな愛撫で楽しむルコア。

翔太くんはそんなことさせないくらいルコアを夢中にさせようと
一生懸命腰を動かしました。

でも、ルコアがほしがる情欲に、翔太くんのそれは届きません。
すぐ気持ちよくなって、ルコアのドロドロの穴の中で
どぴゅどぴゅしたい気持ちで溢れていきます。

「ああ！ルコアッ！ルコアッ！ルコアッ！ルコアッ！ルコアッ！あああああ！」



「あはあああ！」

翔太くんの射精にあわせて、全員が一気に絶頂しました。
友達も、ルコアも、みんな体をがくがくと震わせて快感を味わっています。

（すごい・・・！翔太くんが無自覚に皆を快感で支配してるッ！）

ルコアは打ち出された精液の快感と、翔太くんが感応させる快感で
今までにないくらい満たされた絶頂感を感じていました。

「あはっ・・・ああ・・・すごい満足だよ・・・
みんな、明日もすごいこと、しようね・・・・？」

発情中の

メスドラゴン

木曜日
魔術師の独占欲
（独り占めはよくないですね）

つじもが町に殺ってきた

「僕だって・・・僕だってパパみたいにできるよ！」

その日は友達を一人も連れてこなかった翔太くんに
ルコアさんはがっかりする反面、期待で溢れていました。

「じゃあ、首輪をしてボクの魔力を抑えるから、
翔太くんなりにがんばってみようか？」

「う、うるさい！この悪魔め・・・
こ、この淫らな魂を・・・・し、鎮めたまえ！」

ルコアの魔力はパパが作った封魔の首輪程度では
僅かな効果しかありませんでした。

パパくらいの魔術師になれば、ないよりはまし、の効果はありましたが
翔太くん程度ではあってもなくても一緒です。

「うんうん、いいよ・・・がんばれがんばれ」

「うううううるさい！　ああ！あんまりうごくなぁ・・・」

おっぱいに完全に隠れてしまった翔太くんのペニス。
ルコアが体をすこし動かすだけで、
先端からとろとろとあふれ出した透明な体液で
ぬるぬるぐちゅぐちゅと抗いがたい快感を生み出しました。

「え、もう？もっとがんばって、翔太くん・・・・あっ」

「あっあはっ！はあああ～！」

胸の谷間でびゅくびゅくっとのけぞるペニスと
腰のがくつきで、翔太くんがおもらし射精してしまったのが分かりました。

「ああ、翔太くんッ！いっちゃってるぅ！」

ルコアはせっかくがんばった翔太くんがかわいそうになって、
体を上下に動かし、もっと気持ちよくなってもらおうと動きます。

「わああ！まっだめっ！だめぇえ！ああああああ！」

射精するペニスの先端を絞り上げるおっぱい。
経験値の少ない翔太くんにとって、それは身をよじるほどの快感でした。

意思に反した腰の動きいのせいで
ペニスは胸の谷間からとびだし、びゅるるっ！と
勢いよく精液を噴出してしまいました。

「あはぁ・・・・うんっ・・・・すごくいいよぉ・・・」

「はあはあはあ・・・ああ・・・もう・・・もう・・・・」

パパのように上手に儀式を行えない翔太くん。

自分の半人前な寂しさと、
ルコアのおっぱいにまったく抵抗できない悲しさで
自己嫌悪の表情の中、うっすら涙を浮かべていました。

「ああ・・・・翔太くん・・・も、もう限界・・・・」

愛おしい翔太くん。食べて丸呑みにして、
何度も自分だけの物にしようと抑えてきた感情が
発情期の抗いがたい情欲で爆発しそうになります。

この半人前の魔術師もどきが、凶悪なドラゴンに適うはずもないのに
ルコアを自分のそばに置いておきたい一心で懸命に抗っているのです。

ルコアのゆがんだ情欲は理性をがらがらと崩していき、
ついには翔太くんを押し倒していました。

「やっ！やめっ！はぶっ！」

「なめて・・・乳首なめて・・・あっはぁ・・・
こんな半人前のちんぽで・・・ボクをどうにかできると思う？
ウフフフ・・・・全部搾り取ってあげたいなぁ・・・・」

「あむぅうう！うむぅ！んむぁあ！」

口の中に押し込まれたおっぱいの先端が
びゅくんびゅくんと舌の上で跳ねていました。

むしゃぶりつきたい欲求のまま、
翔太くんは我を忘れておっぱいを嘗め回します。

「うふっ！うふっ！うふっ！翔太くん・・・しょうたくぅん・・・」

乱暴にペニスをつかみ、自分の乳首に押し付けます。
ルコアは暴走し始めた性欲のまま、翔太くんにのしかかり
性の快感を与えて支配しようとしていました。

ルコアの手の中で、ペニスがびくびくとふるえ、一段と大きくなりました。

「あっ・・・でるぅ・・・・翔太くんがイクぅう！」

「んむぅう！あふぅううう！」

白い体液を飛び散らせ、絶頂する翔太くん。
蟲を踏み潰したときに体液を吐き出して死ぬような醜いその景色に
ルコアは絶対的な優越感をあじわっていました。

（ああ・・・このままペニスを引っこ抜いて食べちゃおう・・・
そうして翔太くんに卵を産み付けて、永遠にボクのものにするんだ・・・）

超高等生物が故の驕り、
いつもはその高い能力と知性で押さえつけている本能が
発情によって呼び覚まされた本性であらわになっていました。

「こ、この悪魔め・・・この悪魔め・・・」

翔太くんは無意識のまま、腰を振っていました。

「・・・・・・・・・ふーん」

発情の中で、自我をほとんど失い情欲にふけるルコアでしたが
翔太くんの確かな意思を感じていました。

（こんなふうに惨めに絶頂してもなお、
ボクを自分のそばにおいておきたいんだ・・・・）

ルコアは発情で抑制をほとんど失いながらも、
こんなに可愛い惨めな生物の意思をとても尊いものに感じました。

それは元々思いつきで彼の元に顕現した時に感じた気持ちお同じもの・・・。

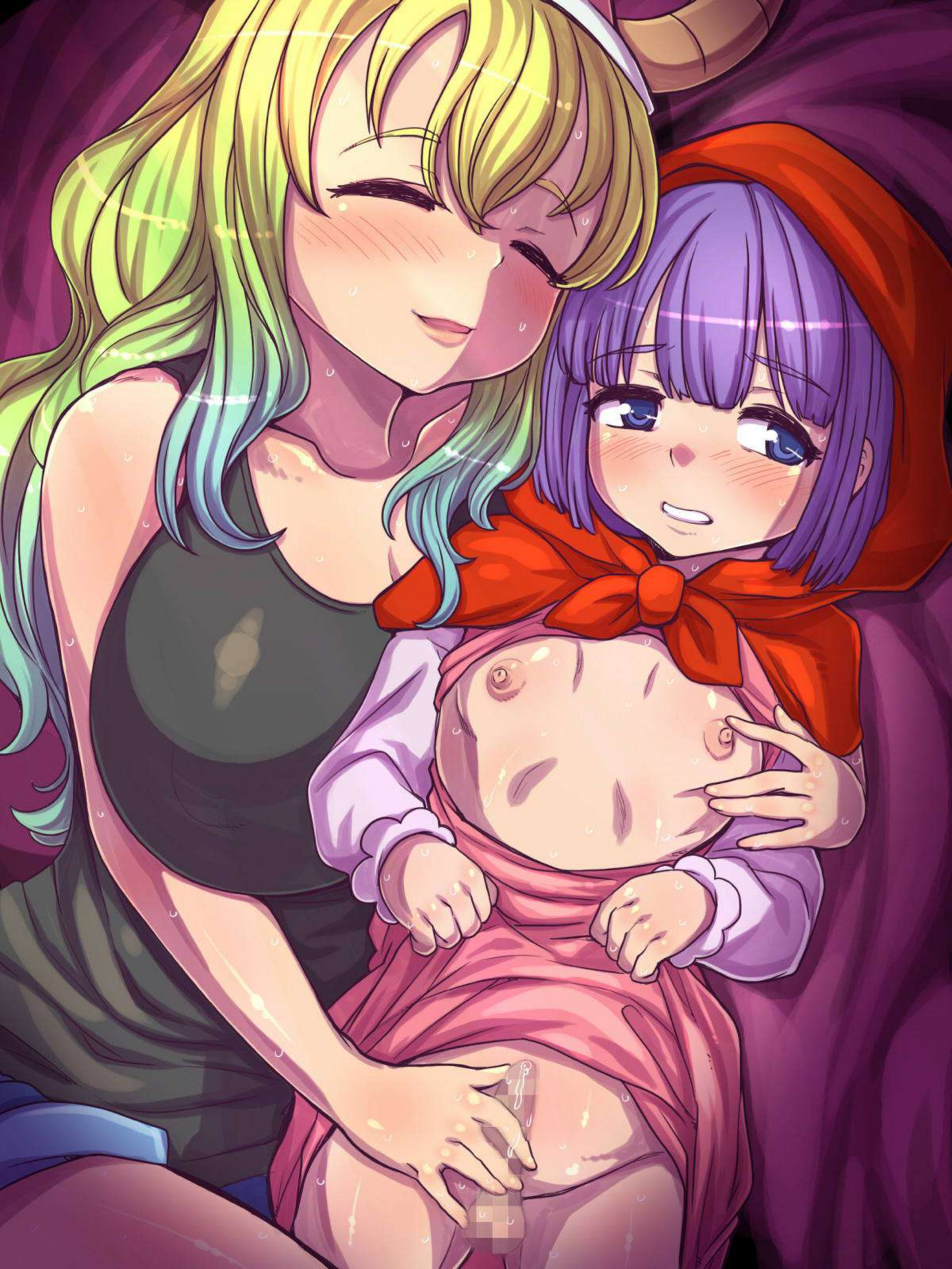
（翔太くんの魔術師としての素養なのかな？
もっと徹底的にいじめたら、もしかしたら・・・・）

発情中の

メスドラゴン

金曜日
素直になる儀式
（自分に嘘はつけません）

つじもが町に殺ってきた



「かわいいね～　ほら、翔太くんの男らしいところみせて？」

「はあはあ・・・こんな・・・恥ずかしい・・・・」

学校が終わるとすぐ、翔太くんは女の子の格好をさせられて
ルコアに嬲られていました。

可愛い可愛いと写真を撮られ、乱暴に服をまくられ、
乳首をなめられ、挙句勃起がばれて、ペニスをさらされ・・・

「恥ずかしい？女の子の格好してるのに、ここはすっごく男の子だねぇ？」

ペニスを優しくくりくりと弄繰り回しながら乳首を撫で回すルコア。
くすぐったいような、気持ちいいような、なんともいえない甘い感覚に
翔太くんは腰をよじりながら言いました。

「ぼ、僕は・・・女の子の格好をして・・・
　こ、コーフンするヘンタイです・・・」

「そうそう、上手上手～　もっと自分に素直になってごらん？」

「お、おちんちんを・・・いじられて・・・うれしいです・・・あ！」

ルコアは翔太くんに感情開放の魔法をかけていました。
一番恥ずかしいと思っている部分を刺激して、
性欲と直結させることで翔太くんの精神を支配する儀式でした。

「恥ずかしいね～恥ずかしいのは気持ちいいよね？
　だってこんなに勃起してるんだもん・・・イキたい？」

「はあっはあっはあっ・・・・あぅ！あああああ！い、イキたいッ！」

「あはぁ！でたぁ・・・・自分で自分をよごしちゃったねぇ
せっかく可愛い女の子の格好したのに、
汚いおちんちん汁ぶっかけちゃったんだ～」

「ああ・・・あああ・・・・よごしちゃったぁ・・・ああ・・・」

「女の子になって、犯されたい？ん？」

ルコアの指が甘く乳首をなで上げます。

びくびくっと背筋を駆け上がる快感に、
翔太くんは夢中になっていました。

「乳首の気持ちよさは女の子の快感だよ？
　もし乳首だけでイっちゃったら、翔太くんは女の子！」

「あぅう！あっ！あああ～！」

翔太くんの乳首をくりくりと責めるルコア。
その指使いは触れたり触れなかったり、急に強くつまみあげたり、
翔太くんが心の奥底で求めている、意地悪で優しい快感でした。

「翔太くんは弱い自分が許せないんだよね
　それは自分が弱いことを自覚しているから

　女の子みたいな華奢な体だから、せめて魔法だけは立派に使いこなしたい
　コンプレックスの現れ・・・・」

乳首を嬲りまわすくりくりとした動きが、やさしく、激しく、
ピンピンと弾くような動きが徐々に早くなっていく。

「ああ、だめ、いっちゃう？女の子のカイカンにまけてイッちゃう？
　翔太くん女の子になっちゃうよ？
　可愛い声でいってごらん？イク？イク？いくぅ？」

「い、いくぅ！ぼ、ぼくいくぅ！女の子になっていくぅ！
　イク！イク！イクッ！いくっ！イクッ！いくっ！イクイクイクウウ！」

「あはぁ！イッたぁ！女の子イキしてるよっ！
翔太くん女の子のカイカンでイッちゃってるよ！　あは！　あはッ！」

またしても自分の精液で自分を汚す翔太くん。
今度はさっきより尋常でない量の精液を顔に浴びていました。

びっくんびっくんと体をのけぞらせて、
より多く自分の顔にブッかけようと腰をつきだして射精しつづける翔太くん。

「ああっ！いくぅ！僕いくっ・・・女の子で・・・いくっ・・・」

自分の弱さを思い知らされて、快感にまけて惨めにイク・・・。

それは劣等感を肥大化させられて、その中で絶頂することで
自分の性癖を自覚していく為の儀式でした。

自分の求めている性欲に一番忠実になることで
性欲からルコアを求めているのか、
もっと純粋な気持ちで傍に留めたいのか

ルコアは翔太くんを試しているようでした。

発情中のメスドラゴン

土曜日
お預けの午後
（裸で正座待機ってやつですよ）

つじもが町に殺ってきた

屈強な男たちに嬲られ犯されるルコア。

土曜の午後、翔太くんの脳裏には
ルコアが乱交に耽る様子が魔法によって映されていました。

「ああ！すごい！もっとボクを犯して！乱暴に突いてッ！」

「このヘンタイ女ッ！おら！おらっ！」「すげえ、コイツすげえしまるッ！」
「ヨガりまくってるぜこの女！」「まじで中出ししていいのぉ？おほぉ！」

醜い男の肉体が、我先にとルコアの体に押し付けられていました。

乱暴に犯されているルコアのビジョンが、一人部屋で取り残され
待っている翔太くんの脳裏にダイレクトに送られます。

「翔太くん、女の子になって犯されるのって、こんな感じなんだよ？
すごくキモチいいでしょ・・・？

男の人の醜い欲望で乱暴に犯されるのって・・・
すごく・・・すごく・・・・・ああああ～！」

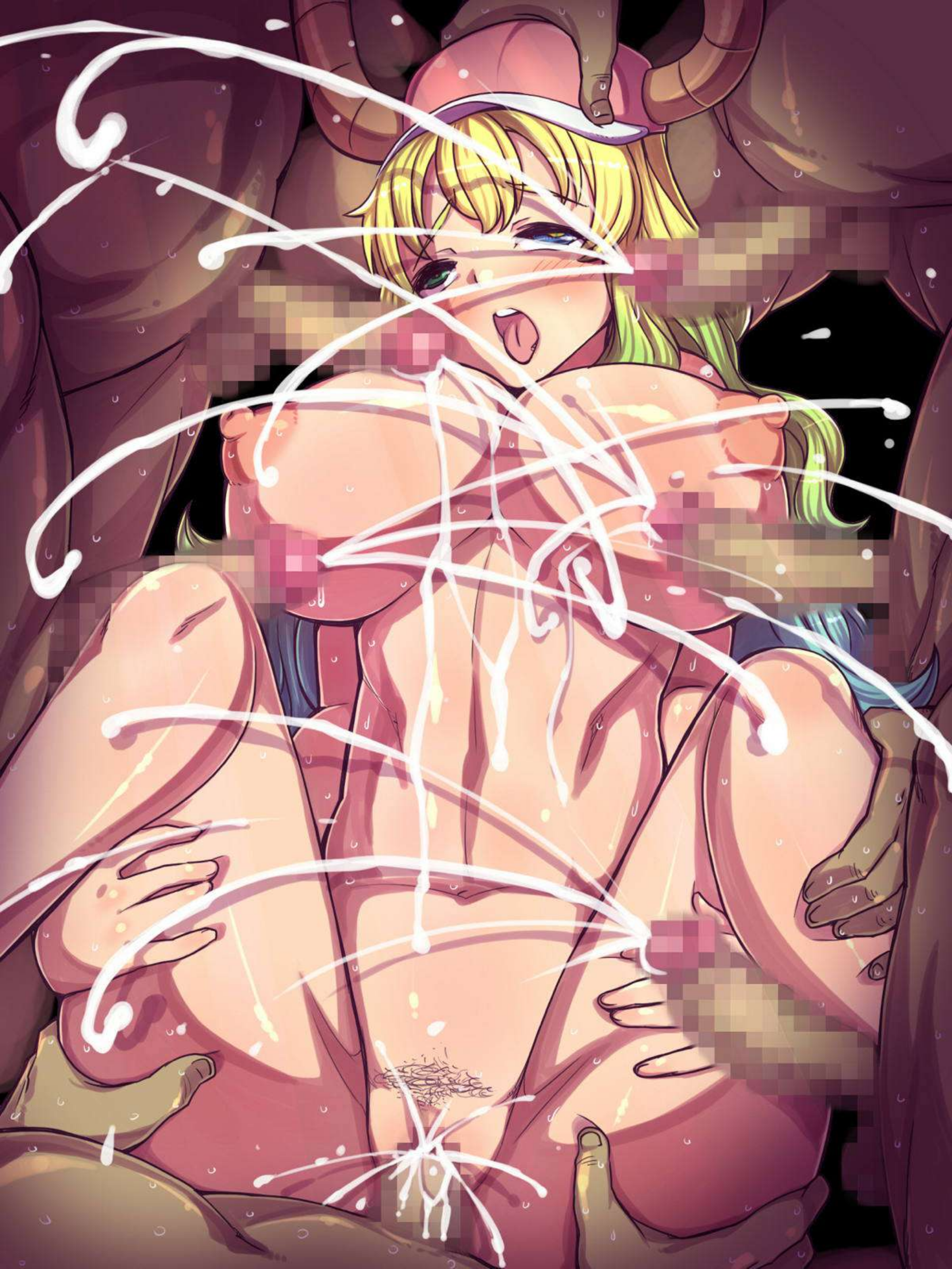
「はあはあはあ・・・・ルコア・・・・ルコアがぁあああああ～！」

自分の父親くらいの男たちに囲まれてレイプされる感覚は
すごく気持ち悪いはずなのに、おちんちんが膨れ上がってしまう、

ルコアが見知らぬ中年の男達に弄ばれているのは
悔しいのはずなのに、もっと乱暴に嬲ってくれとも願ってしまう・・・

ルコアが感じている女の子の気持ちよさと
醜い中年親父達が豊満な女を嬲るオトコの快感が
同時に翔太くんを襲い、気を失うほどの快楽に朦朧としていました。

「んクゥウ！！！！！！！！」



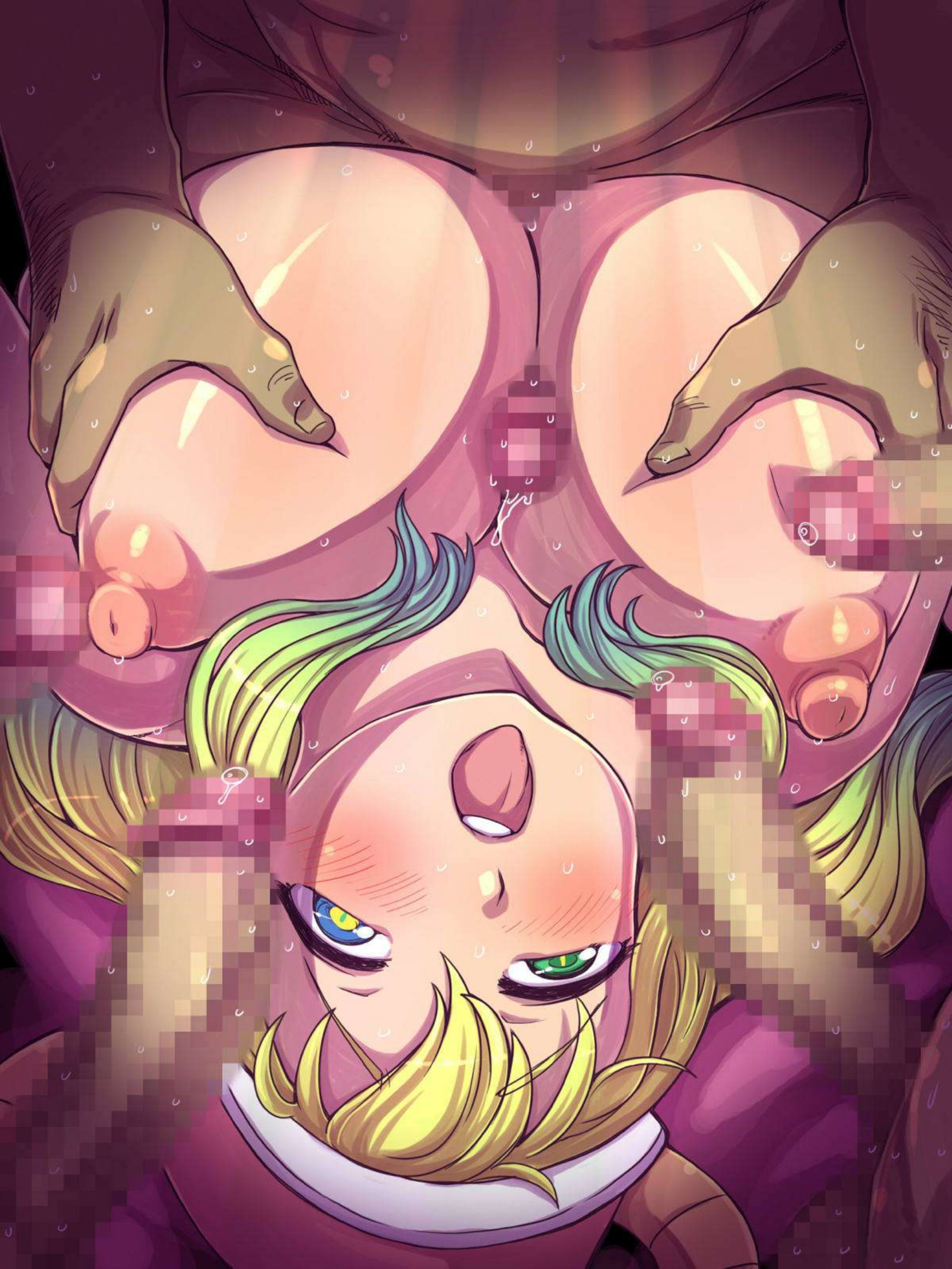
複数の男達による射精の絶頂が、同時に翔太くんを支配しました。
間髪いれず、ルコアのメスの絶頂が翔太くんに襲い掛かります。

「ンッ！んっ！ンッ！！！！」

触れてもいないのにペニスから精液があふれ、
よだれと涙でぐちょぐちょになる翔太くん。

（やめて・・・ルコア・・・これ以上は・・・）
（もっと、もっと犯して・・・ルコアを・・・）

翔太くんの中でエコーのように乱反射する快感と自分の感情に
どっちが本当なのか分からないほど、何度も何度も打ちのめされました。



ルコアのおっぱいを執拗になぶる男達。

翔太くんがしたい行為と同じように、
醜い中年の男達がルコアのおっぱいを嬲っていました。

乳首にペニスをあてがい、ぬるぬるの体液で撫で回し
女の子の快感でイク、あの感覚・・・・。

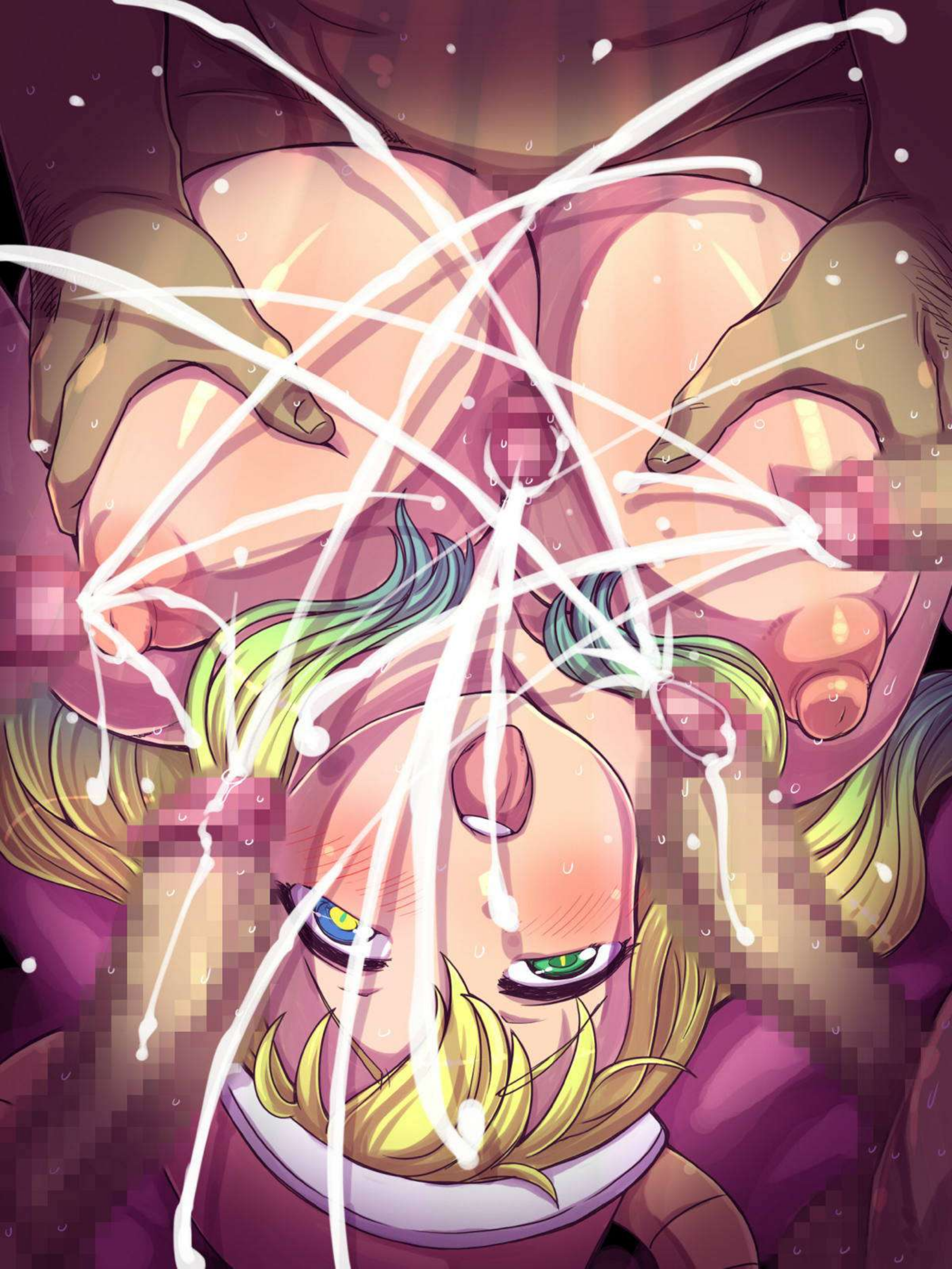
ルコアの輪姦される気持ちよさも、
男たちの嬲る気持ちよさも、
どちらも強烈に翔太くんの脳裏に、何度も何度も打ち込まれます。

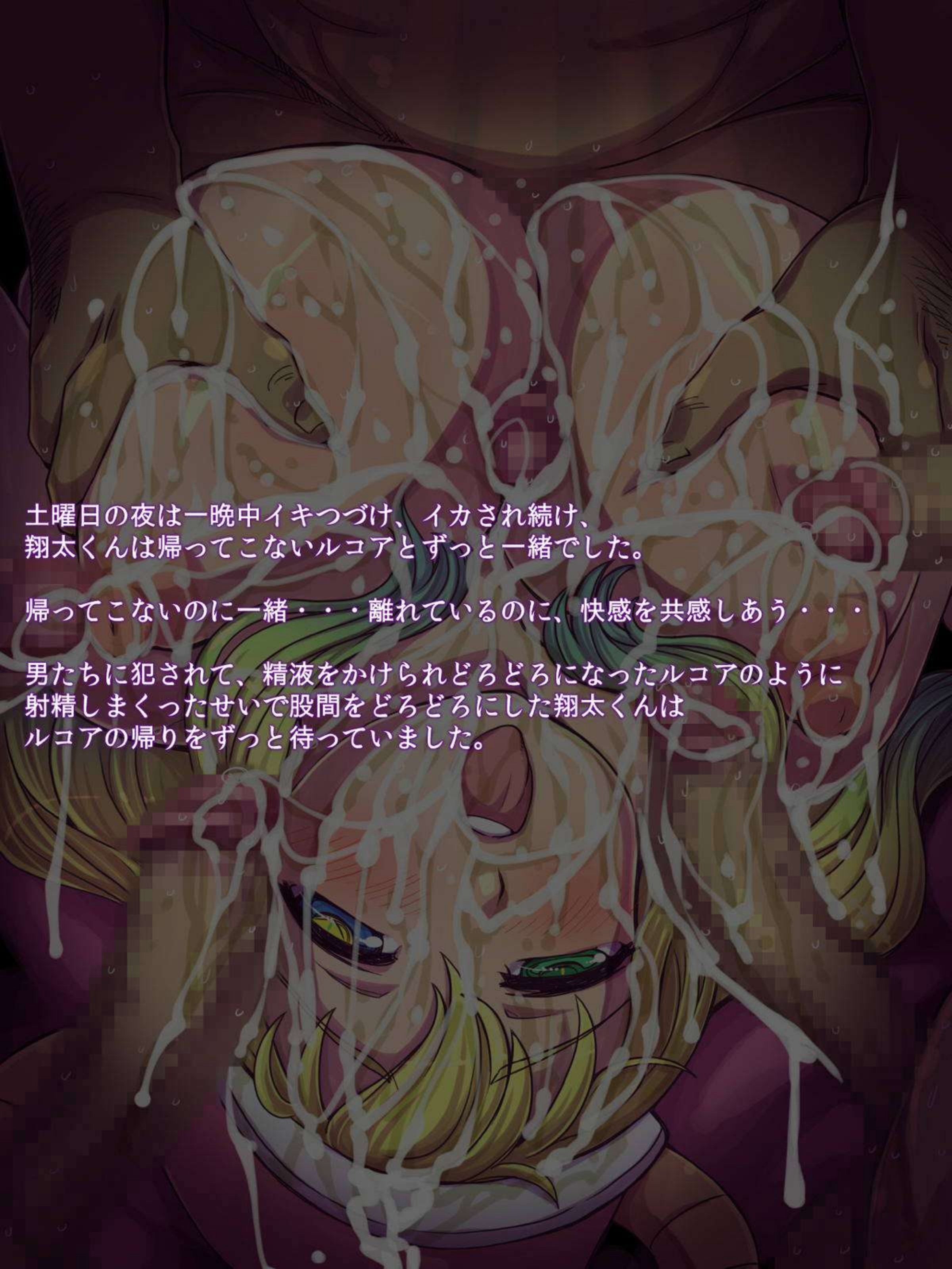
「イクッ！あああ！おっぱいいくぅ！
　きてぇ！みんなで汚してッ！あくっ！あひぃ！！」

「うおぉ出るッ！イクぞこの変態女！」
「でるっ！でるでるでるぅうう！」

僕のルコアが汚されていく、僕以外の男に・・・
僕のルコアが喜んでいる、僕以外の男で・・・

オスの快楽とメスの快感と、大事なものを失いそうな寂しさ、
少年にはとても耐えられないような様々な感情を
一気に押し流すような絶頂感・・・・。





土曜日の夜は一晩中イキつづけ、イカされ続け、
翔太くんは帰ってこないルコアとずっと一緒でした。

帰ってこないのに一緒・・・離れているのに、快感を共感しあう・・・

男たちに犯されて、精液をかけられどろどろになったルコアのように
射精しまくったせいで股間をどろどろにした翔太くんは
ルコアの帰りをずっと待っていました。

発情中の

メスドラゴン

日曜日

何事もなかったかのように過ぎ去る嵐
(めでたしめでたしです・・・か?)

つじもが町に殺ってきた

朝早く帰ってきたルコアに翔太くんは抱きつき、
ホットパンツを強引に脱がすとドロドロになった股間を
ルコアの陰部に後ろから宛がいました。

「ちょ、翔太くん・・・・ボク、疲れてるんだけど・・・」

「だめ、ルコアは僕の物だ・・・だめッ・・・ダメ・・・・」

まだ他の男達の精液が残ってるかもしれない
どろどろとしたルコアの中に、翔太くんは躊躇ぜず挿入します。

「あっ・・・ああ・・・翔太くん・・・ダメだって・・・
今日パパがいる日だよ・・・バレちゃうよぉ・・・・あっあんっ」

腰の動きが、以前の自分勝手な乱暴な動きから、
ルコアを喜ばせようとする深く突き刺すような動きに変わっていました。

夕べの男達の動きとそれによってルコアが喜ぶ感覚を
同時にあじわわされた翔太くんは、どうしたら彼女が喜ぶのか、
気持ちいいのかを嫌というほど知っていました。

それはつまり、ルコアを気持ちよくしてあげたい、
自分だけがルコアの気持ち良い存在でありたいと願う
正直な気持ちだったのです。

（こんなに一生懸命ボクのために・・・ああ・・・・
めちゃくちゃにしたいなぁ・・・かわいいよぉ）

「だめ・・・翔太くん、それ以上されたらボク・・・」

「お願い・・・ルコア、ルコアのこと、好き・・・
大好き・・・！大好きだからッ！ずっと一緒にいて！

け、ケッコン、ケッコンして！ルコア！ルコア！ルコア！」

びゅくっ！びゅくびゅくぅ！

ルコアの中で果ててもなお腰を動かすのをやめない翔太くん。
快感で体が震えても、ルコアが満足するまでは決して動くのをやめない、
そんな強い意志が伝わってきました。

「ああ！翔太くん！すてき・・・・うれしい・・・ああっ！ああ！」

発情中の暴走とはいえ、思わぬ形で翔太くんの本心を
引き出してしまったルコアは、うれしさのあまり
翔太くんの気持ちを受け入れてしまいました。

「いいよ、うん、ケッコンしよう？ずっといっしょだよ？
　ボクの中に取り込んで、もう絶対離れないようにしてあげる・・・！」

ルコアはドラゴンの姿になりそうな自分を必死になって抑制して
翔太くんに跨りました。

夢中になって腰をふり、翔太くんのすべてを
貪りつくさんとばかりに襲い掛かりました。

「全部だしてッ！翔太くんの魔力、精力、生命力！
全部ボクが吸い尽くしてあげるね・・・・

あああ～！すごいっ！いい！壊れるまで犯してあげるよ！
翔太くん！翔太くん！ショウタっ！ショウタぁぁあああ！」

「あああ！あううう！いくううう！いくううう！」

ルコアの影が獣のシルエットになって翔太くんを襲っていました。

ドラゴンと人間では寿命の長さが違います。
その為異種間で一生を添い遂げる約束というのは
どちらかがどちらかの一部になってしまう以外ないのです。

「ああ！とけるっ！とけるうううう！ルコアにッ・・・吸われるぅ！」

翔太くんはルコアの中にどんどん飲み込まれていく感覚が
かろうじて理解できました。

自分という存在が、強大なドラゴンの中へ溶けていく感覚。

「あうぅ！あああああ！！！！いくっ！いくいくいく！いっちゃうううう！」

「あへええ！翔太くんがぁああ！はいってくるぅ！あひぃ！」

人間のようにささやかな存在の生物がこんなに自分を愛してくれるとは、
ルコアにはその瞬間まで考えられないことでした。

所詮下等な生物、情欲でどちらにでも動く愚劣な存在だと。

翔太くんはルコアの発情のフェロモンに当てられた情欲からではなく、
心の底から彼女を愛し、独占したいと思ってくれたのです。

それは未熟な精神が故の過ちなのかもしれません。

でも本当に尊い愛情を感じながら、
ルコアは嘗てない幸福感に包まれていました。

「る、ルコア・・・最後に、ひとつだけお願い・・・・
パパやママ、できたら友達、みんなに・・・・
僕のことを、存在を忘れさせて・・・・

僕が居なくなったら、寂しいと思うから・・・・・」

「アハッ！翔太くん、いいよ、全部ボクのものにしてあげる！
翔太くんの記憶も全部！存在も！全部ゥアハッ！

全部ボク一人だけのモノに！あくぅううう！！！！！」

二人は一つの快楽になって、
まるで永遠の幸福のような絶頂を分ち合いました・・・・・・・

終章

朝ごはんのパンをほおばりながら、
翔太くんはなぜか勃起してしまった股間が
何とか収まらないものか悩んでいました。

「翔太くぅん！僕の帽子しらない？」

リビングに飛び込んできたルコアを見てパンを噴出す翔太くん。

朝のシャワーを浴びてハンドタオル一枚でうろつくルコアに
翔太くんは言葉にならない罵声を浴びせ、
ランドセルをつかむと学校へ、そそくさと出かけました。

先週とはうってかわって、今日はいつもと変わらない穏やかな朝・・・。

「ふう、今回の発情期は楽しかったなぁ～
　まさか翔太くんがあんな形で本気になってくれると思わなかったし♪」

ルコアは先週起こったこと一切の記憶を、
すべての人から消してしまっていました。

「先週の翔太くんは、全部ボクのものだよ・・・・
　フフフ、次の発情期も、また本気になってくれるかな？アハッ」

そうです、翔太くんの命を懸けた告白も、プロポーズも
すべてルコアの記憶の中だけにしまわれてしまったのです。
独り占め・・・なんと欲深いのでしょう。
本人の記憶すら奪い、自分だけのものにしてしまうなんて・・・

ドラゴンは恐ろしい魔力を持っていて、
そしてとても欲張りなのです。

はじめに言ったとおりでしょう？
ドラゴンはとてもとても、
とても恐ろしい生き物なのです・・・・！

お　し　ま　い

あ　と　が　き

メイドラゴンに出てくるドラゴンはいいですね～

うまく記号化してて素敵です。最近は萌え擬人化モノも
かなり設定がしっかりしていて驚かされますね

性別に関してざっくばらんな感じも、神話のごった煮な感じも
八百万の神がいる日本らしくて良い味付けだと思います

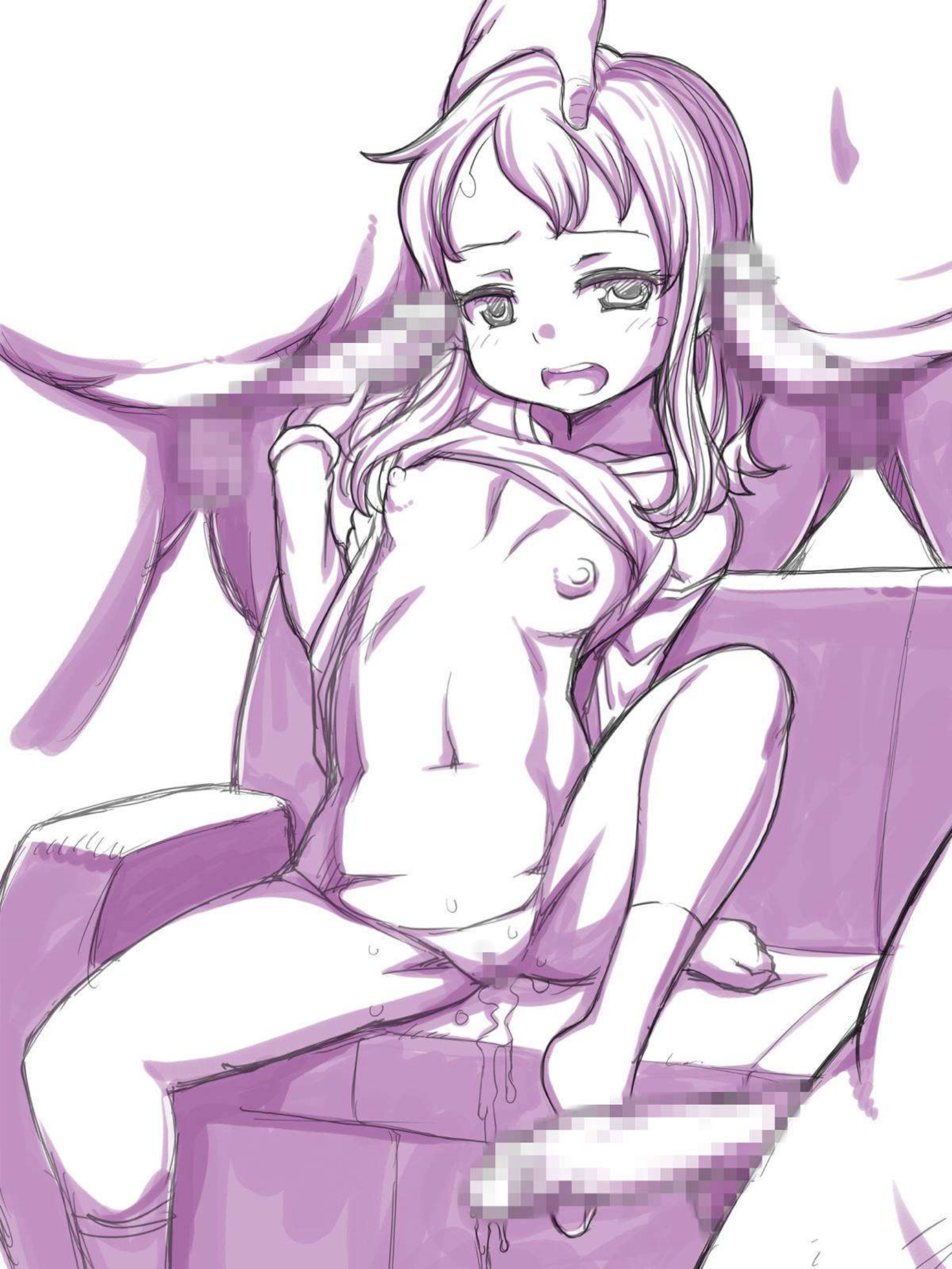
まあかなり記号化されているものですから
あまり愛情とか情欲とか
深く掘り下げるほどのことでもないと思いますが
オネショタは悲哀であってほしい性癖の持ち主としては
神である絶対的お姉さま竜と、非力な人間である魔術師ショタという図式の
ルコ×ショタは必然というか、とにかくしっくりくるものでしたね

実はルコアさんのデザインより翔太くんのフォルムのほうが
個人的にはずっきゅんきてしまったので今作を作ったわけですが！

だからといってＢＬの趣味はないですけど！

そんな訳で発情中のメスドラゴン、
勢いで作ってみたのですがいかがだったでしょうか！
読者様にご満足いただければ何よりです。

なお本作品はフィクションです。実在の人物とか伝承とか
一切関係ありませんからね！ウソんこですからね！

それではまた次回の作品でお会いしましょう！さいならぁ～！

2017.5.28　辻善